
砂色世界の救命師

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂色世界の救命師

【Nコード】

N6502P

【作者名】

守水

【あらすじ】

生にすがりつかないことが常となった世界で再会した、相反する場に立つ二人の話。

第一話

「仕事……？ 兄さん」

「ああ、仕事だ。そんなにかからないはずだから、すぐ帰ってくる」
上着を肩に背負って、兄さんは扉を開けた。そこから入ってきた風のおかげで、兄さんの肩に触れる、くすんだ茶の髪が、少しだけなびいた。

「今度の人……死にたいって言ってるの？ 病気は治せないの？」

「死にたいと言ってる。病気は……わからん。だが俺は患者の意思を尊重したいからな」

風に混じって地面の砂も吹き荒れる中、兄さんは上着を羽織りながら、黄土色のもやの中に消えた。

兄さんが出かけてまもなく、珍しくお客さんが来た。しかも知らない人だ。

「スラナ先生はいるかい？」

僕はその人を見上げた。兄さんと同じくらいの背だ。この砂嵐に慣れてない人なんだろうか、体は砂より少し濃い色のマントで覆われている。薄手の長い布で口元を覆って、フードもかぶってる。そういう格好なので、顔は全然見えなかった。

「今は出かけてていません。すぐ帰ってくると思いますけど」

「そうか。じゃあ中で待っててもいいかな？」

「え、ええ。かまいませんけど……」

声からして、やっぱり兄さんと同じくらいの年齢なのかな。大きめのテーブルの周りに置いてる椅子の一つに、その人は座った。座ってから、やっと口元の布と、フードを取った。

「ふう……。ここいらの砂嵐は本当にひどいな。君はスラナの助手かい？」

黒髪の男の人だった。頬杖をつきながら、その人は僕に聞いた。

「いえ、弟です。あの……あなたは兄さんと親しいんですか？」

「なんで？」

「だって、兄さんのことを名前だけで呼んだんで……」

初対面なのにぶしつけな質問だったと、言ってから思った。僕が子供だったからなのか、笑顔だったその顔から感情が消えた。

「親し……いのかな。よくわからん仲だ。………君、名前は？」

「サシです。あの、お茶でもお出ししますか？」

「くれるのかい？　じゃあもらおう」

僕は席を立て、すぐその岩の壁をくりぬいただけの戸棚から、茶葉を取り出した。自分も飲むから、カップは二つ。

「君は……兄さんがどんな仕事をしてるかって、知ってるんだろう？」

「ええ」

カップにお湯を注ぐ音が止まってから、男の人はまた質問をした。「それがおかしいと思ったことはあるかい？」

心を見透かされたような気がした。つい、お茶を注ごうとした手が止まった。こういうときだけ、僕に向けられっぱなしだった視線が痛く感じる。

「……ありませんよ。だって兄さんの仕事は、この世で求められているものでしょう？」

「確かに、な……」

僕が置いたカップを見ながら、男の人は呟いた。

「人が死ぬのは当然のこと。人によっては、それで苦しむこともある。その苦しみを取り除いてやるのが兄さんの仕事です。僕は誇りに思ってますよ」

「いいやつだな、君は。きっと、俺みたいな外れ者にはならないだろう」

ついたままだった頬杖を外し、男の人はカップに口をつけた。

「外れ者……？　あなたは何をやってらっしゃる人なんですか？」

「聞きたいかい？」

「え、ええ」

男の人が少し笑い、何かを言おうとしたちょうどその時だった。「帰ったぞ、サシ。すまん、砂嵐がいつもよりひどくなって遅れた」

確かにいつもよりうるさい風の音と共に、ドアが開いて兄さんが入ってきた。黒に近い紺色の上着から、砂がたくさん落ちた。

「この分だと、かなり長くなりそうだ………」

言いながら、兄さんはやっと顔をあげた。僕より先に、男の人のほうに気付いた。兄さんの顔が、少し険しくなったように見えた。

「遅かったな、スラナ。人一人殺すのにそんなにかかるのか？」

「砂嵐で遅れたと言ったばかりだろう。それよりユウシ、貴様俺の弟に何の用だ」

今度こそ、兄さんは男の人を嫌ってる態度を隠そうとしなかった。男の人はユウシって名前なんだ。

「お前の弟に用なんかないよ。大体今日初めて存在を知ったんだ。用があるのはスラナ、お前だけだ」

「あの……」

なんだか雰囲気が悪化になってきた。それがものすごくいやだったわけじゃないけど、じっとしてるのはいやだった。

「どうした、サシ」

震えた声になってたかもしれない。それを感じたのか、兄さんはすぐ振り返ってくれた。

「お茶、飲んじやいましたよね、えっと……ユウシ……さん？ 片付けますよ」

「ん？ ああ。じゃ、お願いするよ」

ユウシさんは最初に見せた笑顔と共に、カップを僕のほうに置いてくれた。僕は自分の分も持って、台所に走った。少し遠いけど、会話は聞こえる。

「……それで、何の用なんだ」

がたんと音がした。兄さんが椅子を引いて、そこに座ったんだ。
「今さらだけど、お前ホントにこの仕事続ける気か？ 今なら戻るぞ」

「俺がこの道に入ってもう二年だ。それにお前のいる場所は、すでに影になってる。そんなところへ戻れるものか」

影？ あのユウシって人は、悪い人？

「だが昔は光だった！」

突然怒号が響いたので、僕は一瞬震えた。

「希望だった行為が、なぜ今忌み嫌われるのかわからん。スラナ、お前もどうしてあの時、影の道なんかに入った」

「……何度も言ったらろう。死から救って……何の意味がある。この世界の人間は生に執着しない。救われた後に来る負のことばかり考えて、ほとんどの人間は自ら命を絶つ……。そんな生きようともしない人間を助けて、馬鹿だったんだ俺たちは！」

「勝手に複数形にするな。俺はお前とは違ってな、何があろうと信念は曲げん。確かにこの世界の人間は馬鹿さ。だけどそれは全部じゃない。生きようとしてるやつを、俺は何度も見てきた。お前だって見たはずだ。お前が今やってることは、この馬鹿な人間どもの手伝いだぞ？」

死から救う？ 人を救うのは、安らかな死じゃなかったの？ 確かに昔と今では、救うことの定義が変わったって、兄さんから聞いてたけど……。

「諦めたのさ、俺は。だからこの世の今の流れに逆らわない、この道に変えた」

「……どうやら無駄らしいな」

呆れたような大きなため息と一緒に、立ち上がる音がした。ユウシさんのほうだ。

「だが忘れんなよ。お前のやってることは人殺しの手伝いだ！ いや、殺しそのものだね！ 死から救う方法を知りながら、それを施さない。お前は何十人人を見殺しにしてきた！」

手が震えた。兄さんのことをここまでひどく言うなんて。

「サシ！」

僕は走っていた。突然出てきた僕に、兄さんは驚いたように振り向いた。椅子から立ち上がっていたユウシさんの前に立ち、真正面から見上げて、僕は叫んだ。

「ユウシさん！ 兄さんのことをそんなふうに言わないでください！ どうしてそんなに責めるんですか？ 兄さんは人を救う、一番の仕事をしてるのに！ あなた、自分で自分のこと外れ者って言ってますよね。影の人とも言っていました。なら兄さんの、今求められてる大事な仕事に口を出さないでください！ 兄さんを悪い人なにかに……！」

まともな息継ぎもしないで、僕はまくし立てていた。ユウシさんの驚いた顔が、かすんで見える。長距離でも走ったときみたいのに、息が荒い。胸が……痛い……

「サシ！ 落ち着け、もう話すな！」

自分が倒れかけたんだとわかった。一瞬記憶が飛んでいた。後ろに兄さんがいて、僕を支えてくれている。

「お前自分の体のこと忘れたのか？ そんなに叫んだり怒ったりしたら……」

……そうだった。僕の体は普通の人とは違う。長く走ったり動いたり、今みたいに感情的になると、危ないんだった。

「ごめん……兄さん。つい……」

まだ少し苦しい。目も開いてるはずなのに、視界がはつきりしない。痛みか、兄さんを侮辱されたから、涙が出てばやけてるのかな。自分でも泣いてるかどうかはわからなかったけど、なんとなく腕で目をこすった。

「……ここはひとまず帰るとするか。俺がお前の職業について話すと、どうも弟さんが許さないらしい。だがスラナ」

ユウシさんが立ち上がって、僕と兄さんの横を通り過ぎていく。兄さんは僕を支えた姿勢のまま、首だけをユウシさんに向けた。僕

はまだ意識がはっきりしていないから、声だけを聞いていた。

「昔の医者のおしみで言っておく。人を救う道は……医者としての道は、一つじゃない。それを忘れるな」

強い風が入ってきた。開けられた戸が閉まり、ユウシさんの気配は消えた。

第二話

「兄さん……。あの人も医者なの？」

「ああ」

返事のあとに、あくびが聞こえた。

「昔からの医者さ……。あいつが本当の医者だ」

「え？　じゃあ兄さんは何の医者なの？」

不思議な言葉に、僕は寝返りをうって兄さんのほうを向いた。枕側にある窓からの月明かりで、部屋は真っ暗じゃない。兄さんの影だけが見える。

「俺は、新たに生まれた種類の医者だ。昔の医者はみんなあいつみたいだった」

「兄さんの今の仕事と同じようなことするの？」

兄さんが、大きく息を吐いた。

「いいや、全然違う。昔の医者は病気を治す医者だった」

「え……。どうやって？」

治せる病気があるのは知ってる。でも、そういうのは医者じゃなくとも治せるものだ。

「メス……ってのがあってな。………はは、懐かしい名前だ。まあ、小さいナイフみたいなものだ。患者を眠らせて、そのメスで病気の元がある部分を切るんだ」

「切る……？　体を切るの！？」

僕は本当に驚いた。患者を切る？　それじゃあ、よけい悪くなっちゃうじゃないか。

「ああ。そして体の中にある、腫瘍だったりなんだりを切り取るんだ。そうすると患者の病気は治る」

「でも、そんなのひどいじゃないか！　なんともない部分も切るんでしょ？　人を切るなんて殺人だ！」

僕には考えられない。余計なところを傷つけられてまで助かるな

んて。

「サシ、患者はその間痛みを感じないんだぞ？ 体を切るったって、そういう傷はすぐ治る。医者はどういった手術で、患者の命を延ばしてきていた……」

「え、シジュツ？」

聞いた事のない言葉だ。

「ああ、サシは知らないだったな。そのメスとか、そのほかの器具を使って人の病気を治す行為のことを、手術って言うんだ。もうその手術をする医者はほとんどいない。俺が知ってる限りでは、あのユウシだけだ」

「あの人が……。……ねえ、あの人“昔の医者”のよしみで”って言うってたけど、あれはどういうこと？」

しばらくの沈黙の後、兄さんが口を開いた。

「わからないか？ サシ……。俺も昔は、その手術をする医者だったのさ。だが、この世界の人間は、手術までして生き長らえたくないっていうのが五万という。そんな人間に、俺は諦めたのさ。生きることを望まない人間を生かして、何になるんだ……。ってね」

「……………」

兄さんが元“昔の医者”だということを、僕は初めて知った。でも、この世界の人間がそういう人たちばかりだなんてことも、初めて知った。

「だがやつは……。ユウシは諦めていない。ごくわずかにいる、生きたいと願っている人間たちを、手術で救い続けている。やつのいる場所は、現在では避けられる場所だ。人間を無理に生かさうとする、悪者に見られている。それでもやつはやめないんだ。命を延ばし、少しでも長く生きることが、本当に人間が求めていることなんだ。たとえば意味がなかったとしても、生きたいと願うのが、人間の本来の姿なんだ……。そう言ってたっけな。いつだったか」

「そう、なのかな……」

もしかしたら、それが本当なのかも。それが当たり前だという環

境で育っていないから、僕には異質に見えるだけなのかもしれない。手術に頼らなければ生きられないとき、僕たちは躊躇なく死を選んでいる。静かな死を。そんな世の中でも、生きたいと言う人はやっぱりいるんだ。

「ねえ、兄さんは今でも手術ができるの？ 器具がそろってれば」

「どうだろうな……。ほとんどが研修医の時の手術だからな。……」

……やっぱり無理だ。頼れる助手がいれば別だが、そうでない助手がいたり、一人だったら、絶対患者を殺しちゃう」

自嘲気味に小さく笑って、兄さんは僕に背を向けた。話は終わりでというサインだ。僕も兄さんに背を向けて、目を閉じた。

いた。

偶然といえば偶然だが、こいつとはどうやら腐れ縁があるらしい。砂嵐の中、一軒の家に、やつが入っていくのが見えた。多分、また助かる患者を殺しに行ったんだろう。すぐ近くでそんな人間を殺されるのは、生かす医者として放ってはおけない。

「お願いします、先生……」

年配の女性の声。無駄に手っ取り早いやつだ。俺は衝動的にドアを開け放っていた。声の主の、やはり年配の女性が少し驚いたように俺を見ている。こっちに背を向けていたやつは、振り返ってやはり目をむいた。

「っ、ユウシ!？」

「十日も経たないうちに再会たあ、ずいぶんとめずらしいな。また殺しか」

「ふん、お前には関係ない」

少し歩を進めると、やつの前にはベッドに横になっている、女性と同じくらいの年齢に見える男がいた。多分、この男が患者だろう。いや、被害者か？

「ところが関係なくはないんだなあ。偶然にしろ、俺は生かす医者

だ。目の前に命を絶たれそんな人間がいて、黙ってると思うか？」

「俺の仕事を横取りする気か」

「それで命が助かるんなら、そうするね」

いつもよりも低い声で言われて、少し驚いたが顔には出さない。気づかれないよう、普段どおりに軽くあしらった。

「奥さん、ちょっと体を見てもいいですか？」

「え？ ……あ、ええ、どうぞ……」

俺がどういう人間なのかは知らないらしい。もし俺が殺人者でも、いずれ死ぬ運命だからと、旦那に近づくのを許すだろう。まあ、俺は殺人者じゃないが。

俺は眠っている男の腹を見た。……これか。

「スラナ、とりあえずは診察ぐらいしたんだろう？ 病気は何だい」

「現役の医者は何を言う。……肝硬変だ。見てのとおり腹はふくれ、静脈が浮き出ている。ガンになっている可能性もある。どちらにしろ、手術はひつよ……」

やつが慌てて口を押さえるのを、俺は見逃さなかった。つい笑声が漏れる。

「ははっ、スラナ、お前なんだかんだ言っというて、結局は助けたいんじゃないのか？ 手術の話を持ってくるとは」

「お前がいるから昔の状況を思い出ただけだ……。今は意識はないが、その患者も安らかな死を願っていた。彼女もだ。俺は患者の意思を尊重するからな」

まただ。

こいつは患者の意思とかいうのを盾にして、いつも逃げる。意思を通してばかりいたら、医者の意味がない。助かったところで、新たな生きがいが見つかることだってある。

とりあえず、俺は患者の服を元に戻し、後ろで腕を組んでいたやつを振り返った。視線に気づいたのか、半分伏せていた目がこちらを向く。

「スラナ。お前、逃げるな」

やつの目に、訝しげな光が灯ったのがわかった。

「不完全な理由を押し付けたって、俺には効かん。俺はこの患者を手術で治す。お前にも手伝ってもらいたい」

「なん……だと？ 貴様、俺の仕事を本気で奪う気か？」

あ、本気で怒った。腕を解いて、こちらに詰め寄ってくる。

「この男は死を望んだんだ。病に苦しみたくないうのもあるが、生きがいというものが見つからなかったのも理由の一つだ！ それなのに生かして、そのあとどう生きろというんだ！」

「俺はそうは思わないね！ 命を助けられた患者には、また違った視点で世界を見る事ができるようになるやつもいる。そうなれば、生きがいが見つかるかもしれない。俺はそれに賭ける」

しばらく沈黙が続いた。俺がにらんでるやつの目の色は、俺と同じ黒だということを、俺はガキの頃から知っている。

「……………わかった。手伝ってやる」

観念したような、諦めも混じった声だった。本当にこいつが純粋な死なせる医者だったら、折れはしなかっただろう。

「よし、じゃあ早速始めるか」

「おい、お前ここでやる気か？ いや、その前に器具は……」

俺はやつの言葉を遮るように、小さな物体をかかげて見せた。

「何だ？ それは」

「手術室呼び出し機」

笑って言ったが、やつにはさっぱりわからないらしい。

「まあ見てろって。ここいらは砂嵐がひどいから、あんまり動かせないようにしてるんだ。だけどこういう緊急時には仕方ねえ」

俺は、手に持った物体にあるボタンのひとつを押した。小さく機械音。

「手術室が来るのか？」

「まあそんなとこ」

しばらくして、小さな異変に気づいたのはやつだった。

「……ユウシ、何か変な音がするぞ。砂嵐の音に混じって」

「ほお、やっぱりここいらでの生活が長いやつは違うな。俺にはさっぱりわからん」

言いながら、俺は戸口に向かった。二人で外に出ると、ちょうど真正面から影が迫ってくるのが見えた。

「よし、そろそろだな」

その影の正体ははっきりと確認できる位置で、俺は再度ボタンを押した。影――大型のトラックは、俺たちの数メートル手前で止まった。

「これは……」

呆けたように、やつはトラックを見ている。

「懐かしいだろ。病院まで患者を運ぶのとはまた違う、緊急手術用のトラックだ」

医者たちがどんどん患者を死なせる道に走っていた頃、どうせ使わないからと譲り受けたものだ。病院らしい病院もほとんどない中、俺が人を生かすことができるのは、こいつのおかげもある。

「スラナ、俺はトラックの後部を玄関に近づけるから、お前は患者を運んでくれ。病人を砂嵐に当てて、いいことなんてないからな」

言って、俺は運転席に乗り込んだ。やつはうなずいて、家へと戻っていく。俺はトラックを逆向きにして、後部のドアが家の入り口にぶつかからない程度の距離まで、トラックを近づけた。

「よし、入れろ」

患者を抱えて来たやつを見て、俺はドアを開けた。トラックの荷台に当たる部分が、全て簡易手術室になっているトラックだ。中央に据えられた手術台に患者を乗せてから、やつは中を見回した。

「そんなに懐かしいかよ」

「ああ……。自分が今の医者だということを忘れそうだ」

「いつそのこと忘れちまえよ」

またにらまれるのは予想済みだったので、俺はすぐに背を向けた。そしてこの患者の妻だろう女性に、説明をすることにした。

「奥さん、突然で本当に悪いんですが、これから旦那さんを手術し

ます」

「しゅ、じゅつ……。助かるんですか？」

今の女性の“助かる”という言葉の意味は、生きられるかどうかということだろう。

「助けるつもりです。……。保証はできませんが」

保証できるんだったら、患者はみんな生きてる。

「ただ、全力は尽くします」

保証などできない。けれど、全力を尽くして救おうとしていることだけは伝えたい。

「それでは」

手術室に乗り、俺は扉を閉めた。

第三話

「始めるか……。スラナ、刃先を俺に向けて渡すなんてことはするなよ。いくら長い間手術に立ち会ってないからって」

「そんなヘマするか」

あんまり緊張されても困るから、こうやって少しほぐしておいたほうがいい。別にやつを信じてないわけじゃないが。

「じゃあ頼むよ。患者は五十代男性。肝硬変から肝がんに進展している可能性がある。どちらにしろ肝臓切除術になるだろう。術式開始。スラナ、メス一本」

「随分とてきとうだな。年齢は見た目、手術方法も、何だその言い方は。いちいち言わなくてもいいだろう、俺しかいないんだから。それに、メスを一度に二本も使うやつがあるか」

「今の医者にとにかく言われたくないよ。歳は聞いてないんだから仕方ないだろう。堅苦しい手術宣言なんか忘れた。それでも言っちゃないと完全に忘れそうだからな。“メス一本”はおふざけだよ。ほら、メス」

やつは渋々といった感じで、俺にメスを渡した。皮膚に赤い筋が走るのを、やつはじっと見ている。

「やってみるか？」

「いや、いい。俺がやったら失敗しそうだ」

「失敗したっていいんだろう？ お前は殺す気だったんだから少し嫌味を含めて言ってやった。」

「俺は……こういう形で死なせるのは好きじゃない」

「お前の好みの問題かよ。まあいい。鉗子」

……見えた。色としてはまともなほうだ。お目当ての病巣は、すぐ見つかった。

「やっぱりガン化してる。大きさは……ぎりぎりってとこだな。この程度なら、肝機能が弱っていたとしてもなんとかなる。よし、腸

鉗子」

かなり弱っているように見える患者だが、今のところ心拍数に問題は無い。この調子なら助かる。もしどこかに転移していたとしても、生き長らえることができるのは確実だ。

「電気メス。これで……助かる」

ガンの部分を、大きめに切り取る。切り取った病巣を、やつはしばらく見ていた。

「なんだ、ガン細胞がそんなにかわいそうか」

「いや、別に……」

一通りの手術は終了だ。あとは閉腹して………終わり。

「ふうっ……。これで……」

縫い合わせていた糸を、切ったその時だった。

規則的なそれに代わり、電子音が一直線に鳴り響いた。

「なっ……！」

反射的に顔をあげる。同じ形の山を何個も作っていた白い線が、今はなだらかな平野を成していた。

「ユウシ、心臓が止まったぞ！」

「んなこと言われなくてもわかってる！ くそっ……」

この緊急用手術室は、大方の器具は揃っている。だが、電気ショックがないのが大きな欠点だった。こうなったら、心臓マッサージをするしかない。こんな状況になったのは何年ぶり………いや、なかったかもしれない。手術が成功した途端に、心臓が止まるなんて。

「スラナ、酸素吸入器を！」

俺が叫ぶと、やつはすぐに行動した。やはり昔の医者だっただけはある。俺は休まずマッサージを続けながら、思った。

なぜだ？ 俺は腹を開き、腫瘍を取り除いただけだ。呼吸に関することには何一つ手を出していない。それなのになぜ心臓が止まった？

いまだに、線も音も変化はない。手術のときにさえ出なかった汗

が、目にしみた。

「……………」

その汗のせいでばやけてはいたが、やつが俺の反対側にいて、そして患者に何かを注射しているのが見えた。

「……ユウシ」

どのぐらいだったんだろうか。俺は手の疲労を全く感じていなかった。まるで何か別の部分かのように、腕は心臓マッサージを続けていた。

「もうやめろ。患者は死んだ」

「お前は諦めが早いんだよ！ まだ望みは……」

「心臓マッサージを始めて、何分、いや、何十分経ったと思ってる？ いくらなんでも、ここまできたらもう蘇生はありえない」

何十分経ったかなんて、俺にはわからなかった。やつが俺の腕を掴んでいなければ、ほぼ機械的に動いていた腕は止まらなかっただろう。

「どうして……心臓が止まったんだろうな」

マスクを取って、俺は大きく息を吐いた。横に垂らした腕に、今頃疲れが伝わってきた。

「この世界の人間は、昔の医者にしか治せない病気に陥ったとき、生きる気力をなくす。この患者は、もう生きたくないと思っていた。その強い感情が、生き長らえさせるといふ行為に反発したのかもな。人の想いってのは強いもんだ。自身の願いどおりにするために、心臓を止めることを選んだ……っていうのは考えすぎか？」

「科学的根拠がゼロだな」

そう言うてはおいたが、今まで健康そのものだった心臓が、突然機能を停止することに、科学的根拠を見い出すこと自体難しい。そう思うと、やつのいうことが本当のように感じた。

「お前が納得するように言えば、この患者は寿命だったんだ、きっと。そのほうがお前にとってはしっくりくるだろう？」

「まあ、な……」

俺は、この世界の人間に避けられているのだろうか。自分が正しいと思っても、世の流れに逆らうことは、やはりだめなのか。俺は、患者の顔に布をかぶせた。なぜか、とても安らかな表情に見えた。

生から開放されたことを、喜んでいるかのように。

「お前は帰るのか」

「ああ。時間がかかったとはいえ、俺の仕事は終わったからな」

俺とやつは、後部の手術室と運転席との間にある、小さなスペースにいた。手術を始める前も入った、着替えの場所だ。

「じゃあ、俺はその辺でもうろうろするか。ああ、お前ん家の近辺には行かないから安心しろ」

顔はちゃんと見ていなかったが、目の端でにらまれたような気がしたのでそう言うておいた。一旦止まっていた、やつの服を着ようとしていた腕が、再び動き出した。

ふと、壁にかけていたやつの上着の中に、何かを見つけた。「これは何だ?」と言って取り上げたら、何なのかわからないうちにすぐ取り上げられるのは目に見えていたので、俺はさりげなく近づいて、口を開いた。

「スラナ、そういえばお前、俺が心臓マッサージしているときに、患者に何か注射してたろ」

「……いや、何もしてないが?」

「その間が怪しいな。何をした」

にらんでやったら、少しの間、困ったような嫌そうな顔で見返していたが、ため息を一つついて、俺の問いに答えた。

「俺の職業柄、わかるだろう。毒薬だよ。さっきはああ言うておいたが、見られてたんじゃしかたない」

なるほど、じゃああのビンっぽいのはその毒か。それしか見えなからな。こいつ、なんだかんだ言うておいて、やっぱ患者を殺

す気だったのか？

.....いや。

「そうかい。全く、やっぱり心の奥で考えてることは殺しのことだけかい」

ふと、やつが俺から目をそらした隙に、俺は素早くやつの言う毒薬を取り上げた。見ないですぐポケットに入れたので、何と書いてあるのかはわからなかったが、とりあえずビンだということは確認した。

「手術を知ってたとしても、俺はきつと失敗して、結局殺すことになるだろうよ。だからやはり、俺はこの仕事のほうが向いてるんだ」何も知らないまま、やつは上着を着た。俺のほうが出口側に立っていたので、戸を開け、先に外に出た。いまだに砂嵐が続いている。「じゃあな。また会おうぜ、殺し屋さん」

「別に俺は会いたくないが……。もう俺の仕事に手は出さないでほしいな」

「ははっ、そいつは無理だ。じゃ」

やつはため息をついて、砂嵐の中に消えた。この黄土色の中では結構目立つはずの濃い紺は、あっという間に見えなくなった。

俺はやつのどこの砂嵐に慣れていないから、こうやってフード付きの体を覆うコートを着たり、細長い布で口元を隠していたりする。それでも、やはりずっと立っているのは辛い。やつが見えなくなっ

て少ししてから、俺はトラックの運転席に乗り込んだ。

「さて、あいつの使った薬は何だったのかな……」
懐にしまっておいたビンを取り出す。そして、ラベルに目をやった。

第四話

「……ない」

「え？」

小さく呟いたつもりだったが、思いのほか弟には聞こえたらしい。食事の片づけをしていたサシが、こちらを向いたのがわかった。

「どうしたの？ 兄さん。……なんか顔色悪いよ」

「そ、そんなに悪いか？」

この世に一つしかないわけじゃない。売っているところへ行けばいくらでも売っている物だが、俺はそんなに焦っているのか。

「上着？ 何か落としたの？」

「ああ……」

もう一度、壁にかけている上着の内ポケットをあさる。そんなに数があるわけではない。やはり、見つからなかった。

「そんなに大事なもののなの？」

「いや……」

俺が必要としてるものじゃない。俺がなくしてしまったものは……

……

「——なんだか日増しに強くなってないか？ ここの砂嵐……。よ

お、邪魔するぜ」

「あ、あなた」

またきやがった、ユウシのやつ。あれから三日と経っていないぞ。

「ユウシさん……でしたよね。また兄さんのことで来たんですか？」

「そう怒るなって。俺は今日はけんかしに來たわけじゃない。それにこの件については、サシ君、君にも関係がある」

「僕？」

ユウシが口を開いていなければ、帰ってくださいと言わんばかりだったサシは、ユウシの言葉に少し驚いたようだ。いや、驚いたのはサシだけじゃない。自分の家みたいに、遠慮もせずに椅子に座る

と、ユウシは俺を見た。

「なんだ、上着とにらめっこなんかして。もっと丁寧に扱ってくれなんて、文句でも言われたか？」

「服が口をきくものか。さっさと用件を言え」

俺とサシは席につかず、立ったままユウシと向き合った。ユウシはため息を一つ吐くと、

「お前が上着とにらめっこしてた理由は知ってるぜ。なくしたからだろ？ お前にとって……いや、お前の弟にとって大事なものを」

「な、に？」

なぜこいつが知っている。

「僕に、必要なもの？」

サシが不思議そうに、こちらを見上げてきた。

「おおかた、弟さんに使うつもりなんだろう？ まあ、その前にこないだの患者に使っちゃったようだが」

言いながら、ユウシが何か小さいものを、俺に投げてよこした。慌てて両手で受け取ったそれは――

「……………『強心剤』？」

俺の手を覗き込んだサシが、呟いた。

「あの時、お前はそれを患者に投与した。それでも、あの患者は死んだ……。だから、あの時お前が言ったこと、信じられるぜ」

用件とはこのことだったのか。ユウシは席を立つと、入り口へと歩き出した。

「しかし、俺もうダメかもしれねえな。強心剤のことすっかり忘れてたとは。今の医者に教えられるなんて、もう俺も商売やめなといけないうてことか？」

自嘲に似た笑いを含みながら、ユウシは戸を開けた。やつの言ったとおり、砂嵐は前より強くなってきているようだ。

「ユウシ、お前、どうしてサシの心臓が悪いと……」

「……感情が高まった人間に、目の前で息苦しうにぶっ倒れられたら、誰だってわかるよ。じゃ」

フードを下ろし、口元を布で隠す前、ユウシのこぼした声が、なぜか澄んで聞こえた。

「スラナ、お前が完全に今の医者になったんじゃないようで、安心したよ」

俺はまだ、一人じゃないんだな――。

そう思っているように、聞こえた。

「兄さん……。患者……。って？ 兄さんのところに、あの人が来たの？」

サシには、ユウシが来たことは話していなかった。ずいぶんと嫌っているようだったから。

「ああ……。話すか？」

「うん」

「よし、じゃあ片付け終わらせたらな」

そう言い、俺はサシを片付けに戻らせた。手の中の小ビンを、上着のポケットに戻す。

人を救う道は、一つじゃない、か……。

俺は完全に今の医者になったわけじゃない。……。確かにそうだ。

もしそうなら、サシが心臓の病で苦しみ、死にそうになったら、迷わず静かな死を遂げさせようとする。だが俺がそうじゃない証拠に、俺はサシを少しでも生かそうと、あれをいつも持ち歩いてるんじゃないか。

だがそれは……。肉親だからじゃないのか？ いや、違う。あの時ほぼ無意識に、俺はあれを患者に与えていた。じゃあ、俺は……。

「兄さん、終わった！ 話聞かせて！ あのユウシって人、兄さんのどこに来て何してたの？」

「じゃあ、教えてやるから座ろう」

今考えるのはよそう。考えたところで、すぐ答えが出るような問題じゃない。

「ユウシとな、手術ってやつを、やったんだ……」

あの人間は死んでしまった。でも、自分は命を生かそうとしたん

だという話を聞かせるだけで、なんだか誇らしかった。

それは、俺の中にユウシと同じ “ 生かすこと ” の悦びが、いま
だ残っている証なんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6502p/>

砂色世界の救命師

2011年1月1日16時57分発行